

# 陶町歴史ロマン 20



## 15、続 学校教育

(5)教育勅語（明治23年）発布

### 【現代語訳】

私の思い起こすことには、我が皇室の祖先たちが国を御始めになったのは遙か遠き昔のことで、そこに御築きになった徳は深く厚きものでした。我が臣民は忠と孝の道をもって万民が心を一つにし、世々にわたってその美をなしていきましたが、これこそ我が国体の誉れであり、教育の根本もまたその中にあります。

あなた方臣民よ、父母に孝行し、兄弟仲良くし、夫婦は調和よく協力しあい、友人は互いに信じ合い、慎み深く行動し、皆に博愛の手を広げ、学問を学び手に職を付け、知能を啓発し徳と才能を磨き上げ、世のため人のため進んで尽くし、いつも憲法を重んじ法律に従い、もし非常事態となったなら、公のため勇敢に仕え、このようにして天下に比類なき皇国の繁栄に尽くしていくべきです。これらは、ただあなた方が我が忠実で良き臣民であるというだけのことではなく、あなた方の祖先の遺(のこ)した良き伝統を反映していくものでもあります。

このような道は実に、我が皇室の祖先の御遺(のこ)しになった教訓であり、子孫臣民の共に守らねばならないもので、昔も今も変わらず、国内だけでなく外国においても間違いなき道です。私はあなた方臣民と共にこれらを心に銘記し守っていきますし、皆一致してその徳の道を歩んでいくことを希(こいねが)っています。

明治二十三年十月三十日

紀元節（2月11日）、天長節（天皇誕生日）、明治節（11月3日）および1月1日（元日、四方節）の四大節と呼ばれた祝祭日には、学校で儀式が行われ、全校生徒に向けて校長が教育勅語を厳粛に読み上げ、その写しは御真影（天皇・皇后の写真）とともに奉安殿に納められて、丁重に扱われた。

「水川小学校沿革」に明治26年の拝賀式（元日）の式次第の記載があり、それによると



- 1、 職員生徒着席
- 2、 両陛下の御真影に敬礼
- 3、 生徒総代祝分朗読
- 4、 新年の唱歌合唱
- 5、 教育勅語奉読
- 6、 校長演説
- 7、 「君が代」合唱
- 8、 両陛下の御真影に再敬礼
- 9、 職員生徒退場

と、あります。**天皇への忠誠と、日本古来からの道徳**を大事にしたのです。

これは、西洋の学術・制度が入る中、軽視されがちな道徳教育を重視したものである。もちろん、西洋文明にも宗教（キリスト教）を背景とした道徳教育は存在するが、それを直接日本人に適用するわけにもいかず、かといって伝統的に道徳観の基本として扱われてきた儒教や仏教を使うことも明治政府の理念からすれば不適切であった。このため、伝統的な道徳観を、天皇を介する形でまとめたものが教育勅語とも言える。

教育勅語は、決して軍国主義を肯定したものではなかったが、この時から大日本帝国の臣民としての教育が始まったのは否定しようがない。

治安維持法体制下の 1930 年代（昭和）に入ると、教育勅語は国民教育の思想的基礎として神聖化された。教育勅語の写しは、ほとんどの学校で「御真影」（天皇・皇后の写真）とともに奉安殿・奉安庫などと呼ばれる特別な場所に保管された。また、生徒に対しては教育勅語の全文を暗誦することも強く求められた。特に戦争激化の中にあって、1938 年（昭和 13 年）に国家総動員法（昭和 13 年法律第 55 号）が制定・施行されると、その態勢を正当化するために利用された。そのため、教育勅語の本来の趣旨から乖離する形で軍国主義の教典として利用されるにいたった。

私が子供のころには（昭和 40 年頃まで）どこの家も座敷には、明治天皇あるいは昭和天皇の天皇皇后両陛下の写真が飾ってあったような記憶がある。

#### ○昔の修学旅行

この当時の高等科生徒は村のエリートであり 3・4 年生になれば大人扱いされていた。明治 32 年の陶村高等小学校の高等科 3・4 年生 12 名の修学旅行日程・旅程を見ると

- 10 月 31 日 登校発足 中馬街道を経て名古屋着
- 11 月 1 日 第 3 師団営舎内参観
- 11 月 2 日 市内各学校博物館等を参観し熱田神宮参拝
- 11 月 3 日 関西鉄道に乗車 伊勢神宮参詣



明治天皇皇后両陛下御真影

11月 4日 午後2時名古屋へ帰る 同日滞在

11月 5日 市内各所工場参観 一同撮影

11月 6日 帰路下街道土岐津町高山泊

11月 7日 陶磁器講習所参観 午後3時帰校

実に7泊8日の大旅行である。これは明治30年に猿爪村・水上村・大川村が合併し陶村が誕生しての大判振る舞いでもあったと思うが、名古屋から伊勢までの移動以外は基本徒歩であるから当時の生徒の健脚ぶりに驚くばかりです。この旅行を経験させてもらった生徒たちは、親を含めても初めてであろう汽車に乗車し、大都市名古屋の博物館・工場を見学し、自分は村のエリートであると認識して、自分の村に生涯貢献するとの決意を強くしたことであろう。

#### (5)改正小学校令（明治33年）

発布以来、改正を重ねた小学校令は明治33年にも下記の大改正がありました。

明治33年の主な改正点は下記のとおりである。

- ・授業料の廃止。
- ・義務教育の期間を3年、もしくは4年とした。
- ・学科の種目を簡易化し、読書・作文・習字を一括して国語とする。
- ・漢字を制限し、字音、仮名遣いを簡易にする。
- ・職員は、正教員、準教員の外に代用教員をおく。
- ・教科書の国定制定の採用。

こうして就学率・出席率は徐々に向上してゆきましたが、女子の就学率の向上はまだまだでした。

#### (6)改正小学校令（明治41年）

日清・日露戦争に勝利した日本は、国際的地位の向上の為には教育水準を引き上げることが必要であると小学校令を改正し尋常科を6年と2年延長し義務教育化しました。

以降昭和16年の国民学校に改定されるまで大きな改正はありませんでした。

#### ○遠足・通信簿

この頃より遠足・通信簿制度が始まり、遠足は当時健足旅行と称し、体力向上をめざしてかなり遠くまで足を延ばしたようである。陶からは、明智小学校まで出かけたとか、岩村まで出かけたとかの記録があります。

また、通信簿は試験昇級を廃して日常の学校生活を評価し進級するように改めたもので、成績通知のみならず、学校での日ごろの生活の通信も兼ねていました。

## (7)大正時代の教育

- ・ 国民道徳の向上・徹底
- ・ 児童生徒の健全育成
- ・ 教育方法・施設を地域の実情に合わせ創造 ということが計られました。

これにより陶では補習科の新設が承認され、陶村立猿爪工農業補習学校が猿爪尋常高等小学校に開校しました。陶での主要産業が工業（陶磁器産業）と農業（米）であったことが分かります。

また、陶小学校沿革史によると、生徒を教師が引率して吉田小学校・明智小学校の運動会を参観したことが記されています。近くの学校施設の視察が目的だったのでしょう。

## (8)陶尋常高等小学校

陶村には猿爪と水川に二つの学校があり、この事が村の財政を圧迫していました。学校運営費が村の財政の 6 割を占めるに至っていたのです。何とか1校にしたいと統合問題が沸き起こってきました。

この学校統合という難しい問題に取り組んだのは、時の町長永井孫太郎と、その後を継いだ中村僊輔である。校地は猿爪区と水上区の境界付近に選定し、校舎と講堂は境界線上に建設するというアイデアで両地区の人々を納得させたという。また、水川学校を4年生以下の分校として残す。



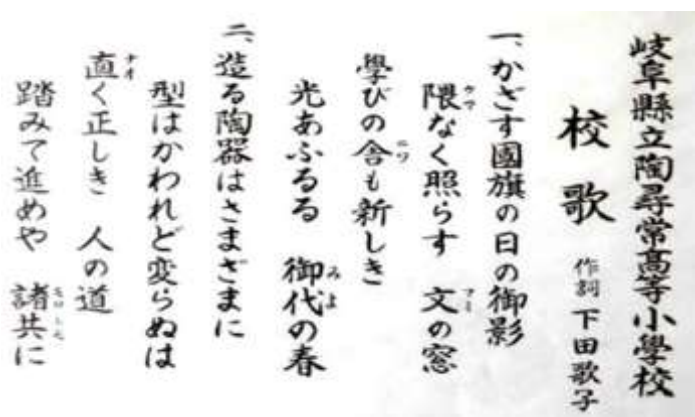
猿爪校の校舎の取り壊した材

木を第2校舎（山側の校舎）に使うなど、苦勞して新しい陶町（昭和7年に村制から町制へ）に新しい学校を建設したのです。

昭和8年に現在の陶幼稚園のある場所に新校舎を着工し、翌9年に猿爪尋常高等小学校は水川尋常小学校と合併し陶尋常高等小学校としてスタートします。

陶尋常高等小学校の校歌は東濃の名士の一人、岩村町出身で実践女子大の学長（日本における女子教育の先駆者）である下田歌子が作詞しています。下田歌子という名前は、一度は聞いたことがあるかと思います。陶苑 26年度 NO.5号によると「下田歌子は、晩年に郷里東濃の学校の校歌を多く作詞しているようですから、陶尋常高等小学校の校歌も昭和の始めに作詞されたと思われる。」とあります。歌詞に「学びの舎も新しく…」とありますから、新校舎竣工の昭和8年に作詞されたと思われます。

名士 下田歌子に作詞依頼するには、礼儀を尽くすのはもちろんの事、相当のお金もかかったと思います。当時の陶にはそれだけの力（財）があったということも忘れてはいけません。



下田 歌子(1854~1936)  
明治から大正にかけて活躍した  
教育家・歌人。  
実践女学校創設。  
岩村町出身

私（昭和 25 年生れ）は、昭和 36 年頃 昔の陶小学校の講堂のステージ裏通路で上記の校歌の入った額をみたことがあります。戦後の教育では不要なものとなり放置されていたのでしょう。

また、昭和 11 年には水川分教場新校舎が完成しています。この校舎は後に陶小学校水川分校となりましたが、昭和 41 年陶小学校に統合され廃校となり、その後は水川保育園として使われました。



#### (9)陶国民学校

国民学校とは、日中戦争後の社会情勢によって

日本に設けられた学校である。陶尋常高等小学校は昭和 16 年（太平洋戦争開戦の年）陶国民学校と改称されました。

昭和 18 年には「学徒動員体制確立要項」が閣議決定され、軍事訓練・勤労奉仕に積極的参加が呼び掛けられます。陶国民学校でも勤労働員の記録があります。

昭和 19 年 11 月 1 日 高 1、高 2 の男子が曾根磁叟園へ。

高 2 女子が山五ステアタイト（真空管の内部に使う絶縁材）、恵那航空工業へ。

昭和 20 年になると、更に頻繁に行われたようです。

また、戦時中の食糧不足で食糧増産の必要から学校の運動場が畑に変わったのもこの時



期で、この頃学生だった人からは「戦時中の学校では勉強なんかほとんどしとらへん。運動場での百姓と、工場への勤労奉仕と、本土決戦をにらんだ軍事訓練に明け暮れていた。」と聞いています。

学童疎開もこの時期で、陶には名古屋の荒子（現：中川区荒子町）国民学校の児童が集団疎開してきました。

また、戦況が厳しくなった昭和 19 年になると高等科の生徒からは出征する生徒も出てきます。瑞浪市史（教育編）に、当時の同級生から出征する友への送別の辞が記載されています。

大東亜戦愈々（いよいよ）腥臊（せいそう…生臭い）苛烈を極め、一億国民の士は益々緊張の度を加へ、国を挙げて戦争に力を注いでいます今日、多年の素志此処に遂げられ国家の干城（かんじょう…「干」は楯（たて）の意で楯となり城となって国家を守護する軍人）として皇国の興廃を双肩に担い勇躍帝国海軍に入団される稲垣〇〇君、又宿望叶って我が帝国の生命線たる満州の広野に鋏の戦士として出発される仙石〇〇君、三宅〇〇君の三君が、僕達の級より出身されたることは、同級生一同の最大の名誉であります。しかし顧みれば（中略）総て苦楽を共にし、あたかも兄弟のごとく睦み合ってきましたのに、今栄えある修了式を目前に控えてお別れすることは、君等の残念は申すに及ばず僕等同級生一同最も遺憾に思ふ次第です。しかし、今の時局は僕等に一刻の猶予も許しません。国家は寸刻も早く僕等の社会に出るのを期待して居るのであります。このところに思いをいたし、これ単に君国のためと思へば僕等は喜んで君等の壮途を祝します。又僕等も四月にはそれぞれ産業戦士として君等の後を追う心算であります。如何なる仕事に従っても第一に必要なものは、強健なる身体です。くれぐれも健康に留意され、「撃ちてし止まむ」の決意をもって、大いに心身の修練に努められ皇国の為、釜戸国民学校の名誉にかけて大いに奮闘の程切望します。（後略）

昭和 19 年 2 月

同級生総代 〇〇××

陶の国民学校からも上記同様に出征の式典があったことでしょうか。

当時の生徒は「お国のため、両親のため」と教えられ、信じ、戦地に赴くことを名誉としていたのでしょうか？

おそらく表向きはそうであっても、本心は恐怖心と闘いながら、自らを奮い立たせ戦地へ旅立ったことであろう。更に、まだ幼い子を出征兵士として送り出す親の本心は？

現在の平和を喜ばずにはおられません。

#### (10)終戦直後の教育

戦争に敗れた日本は、連合軍最高司令官総司令部（GHQ）により軍国主義を否定、極端な国家主義を否定した教育改革が施されます。この政策に引かかる部分を黒塗りした黒塗り教科書で勉強しました。黒塗りできない「修身」「国史」等の授業は廃止されまし

た。もっとも終戦間もなく物のない時代ですから勉強どころではなかったとは思いますが。

瑞浪市史（教育編）に当時の先生の所感が載っています。

・戦争の真相を知るまでは政府の言を信じ、聖戦なるものと思ひ、政府の指示に基づき活動したるも、敗戦後侵略戦なることを知らされ意外に感ずると共に盲信することの否なることを知り批判的な態度の必要なることが判った。

・経済的にも政治的にも無理な戦争であった。

・政治上に於いても経済上に於いても一部の専断は大いなる誤りに陥ることあるを知らされた。

### (11)陶小学校

戦後の民主主義を掲げた日本は昭和22年3月に教育基本法と学校教育法が制定・公布され6・3制の義務教育がスタートし、陶国民学校も陶小学校と改名されました。



戦後不況の中、陶には陶磁器という仕事があったので各地から陶に来る人もあり、また折からのベビーブームもあって、陶小学校の生徒数は飛躍的に増えました。最大生徒数は昭和23・24年生まれで1学年180人くらい在籍していたと思います。その当時は50人学級ですので、この学年は4クラスありました。

さすがに4クラスあったのは3学年ほどで、昭和25・26年生まれ以降は1学年3クラスの時代が続きます。

永井町長、中村町長が苦勞して造った木造の陶小学校も老朽化し新しい校舎が必要となり、昭和41年に現在に至る鉄筋3階建ての陶小学校が竣工されました。同時に水川分校が陶小学校に統合され、校歌も制定されました。陶小学校はこの時まで校歌はなかったのです。木造校舎を卒業した私たちの頃には校歌がありませんでした。だから、私たち世代は陶中学校で初めて校歌というものに出会い、深く心に刻みました。

#### ☆陶小学校歌☆

1 じきのきよさ そのままの  
にござぬころを まなびやに  
ただしいちからで かけます  
ああ われらの ほこり  
すえしょうがっこう

2 かたはかわれど かわらぬは  
きぼうのはななど ひとのみち  
ひろくしあわせ おさめます  
ああ われらは みがく



すえしょうがっこう

- 3 まちのさかえを うけついで  
みんななかよく すこやかに  
つよくたゆまず すすみます  
ああ われらはそだつ  
すえしょうがっこう

私が高校に通っていた頃（1968年頃）、バスの車窓から陶小学校を見ると、鉄筋3階建ての陶小学校の上に鉄筋4階建ての雇用促進住宅があり、「陶って凄い！大都会みたい！」と思ったものです。

## (12)陶中学校

戦後の昭和22年、新学制が実施され、恵那郡陶町立陶中学校が開校されました。

場所は現在の陶中学校体育館下の駐車場辺りです。前記の陶小学校の第3校舎を使って開校されました。この校舎は後に第1次ベビーブームで膨張した陶小学校の教室に、さらに陶保育園としても利用されました。



昭和23年、吉田村立吉田中学校と合併し、陶町立吉田村組合立陶中学校となりました。

新校舎建築に奔走したのは時の町長加藤快三である。彼は昭和22年に多治見市商工課長から陶町長に転身した人物である。24年に校舎建設委員

会設置し、町民の寄付を募るとともに、校地の造成を町民の勤労奉仕作業とするなどで費用を捻出し、昭和26年に新校舎を完成させた。同年11月には文部大臣より「施設優良校」の表彰を受けています。

町民の勤労奉仕では、まず各町内に作業日を割り当て、その作業日には、その日の整地割り当て（「ここまでお願いします」）を荒縄で表示し、そこまで埋立て整地させるという



厳しいものだったという。また、当時の中学生も自宅から竹蓑・スコップなどを学校に持ち込み、勉強そっちのけで埋立て整地にあたったといひます。

新規に埋め立てのグラウンドには当時の陶磁器窯は亜炭・石炭窯であったので、亜炭・石炭の燃え殻である炭ガス・コークスが大量に埋められた。このことにより、陶中のグラウンドは大変に水はけが良く、雨が降ってもやみさえすれば即使用可能と評判のグラウンドであった。

この校舎は、残念ながら平成4年6月30日に火災により木造校舎と付属施設を焼失してしまつた。

話しは少し遡りますが、昭和26年には新校舎竣工とともに今に続く校歌が制定されている。



#### ☆陶中校歌☆

1. 陶の山脈うるわしく  
紅匂う朝空に  
はくや炎のあかあかと  
照らす光を輝かす  
我らの誇り 陶中学
2. 陶のさかえもかぐわしく  
ますみの磁器のつやつやに  
恵那の郡の淡気郷  
ふるきゆかりに磨きゆく  
我らの誇り 陶中学
3. 陶の学徒の意気高く  
若き心を凝りなして  
清く雄々しく 逞しく  
のぼるほまれをうちたてん  
我らの誇り 陶中学



校歌は、作詞を伊藤史郎さん（工業組合）の紹介で名古屋の歌人浅野梨郷（りきょう：本名としさと）先生に、作曲は医師水野耕太先生婦人の紹介で国立音楽大学の音楽教授岡本敏明先生に依頼し完成した。岡本先生にとって、当時の校歌は荘重調の曲が多い中、元気な若者が明るく高らかに歌える会心の作だったそうです。

作詞者・作曲者二人の事をネットで調べてみると

○浅野梨郷（1889～1979年）



浅野梨郷は、明治 22 年に名古屋市で生まれました。幼いころから歌をはじめ、県立第一中学校（現旭丘高校）を経て、東京外国語学校（現東京外国語大学）に進み英語を学びました。正岡子規の弟子にあたる伊藤左千夫に師事し、歌誌「アララギ」の第三号から出詠を始め、斎藤茂吉や土屋文明らとともに研鑽をつみました。鉄道省などに勤務した後に 43 歳で名古屋に戻ってから、中部日本歌人会委員長、歌誌「武都紀」の代表を務め、多くの後進を育成しました。昭和 44 年勲五等瑞宝章を受勲、昭和 54 年には徳川園内に歌碑が立てられ、同年 89 歳で生涯を終えました。

○岡本敏明（1907～1977年）

岡本敏明は、1907（明治 40）年 3 月 29 日、宮崎市で生を受けた。父は同志社神学校で伝道に従事しており、そのため日本国中を 2～3 年程度の長さで転々とする幼少期を過ごした。母は教会での礼拝のオルガンを担当しつつ、牧師夫人として務めを果たし、多忙な毎日を送っていた。このような家庭環境もあってか、岡本は中学生の頃から、自

ずと音楽学校への進学を志すようになった。その後、入学した東京高等音楽学院（現・国立音楽大学）の高等師範科では、「作曲の出来る教師」となるために研鑽に励み、1929（昭和4）年3月に卒業した。



岡本敏明

よく知られている「蛙の合唱」は、玉川に滞在していたスイスのチンメルマン博士が本学園の生徒を指導する様子を聴いて、岡本が日本語訳をつくり、日本各地に広まったものである。岡本は「蛙の合唱」から輪唱のおもしろさに気づき、この曲も含めて何百曲もの輪唱曲を日本の小中学校に紹介した。同様に「どじょっこふなっこ」も玉川から日本中の小中学校で歌われるようになった。この曲は、玉川学園の合唱団が、1936（昭和11）年の春に、秋田市を訪問した際の歓迎会のときに誕生したものである。訪問先のある先生が、詩吟を朗唱するように、「春になれば氷（すが）こもとけて、どじょっこだのふなっこだの、夜があけたとおもうべな」と、歌ったところ、岡本が瞬間的に興味を示し、その場で男声合唱用に採譜を始めたのだ。やがて会が終わる頃になると、今度は生徒たちが、混声三部の合唱で「どじょっこふなっこ」を先生方に披露した。会場内は大いに盛り上がったという。玉川音楽には、このように周囲にいる人々に、笑いと喜びを共有する力がある。その礎を創ったのが岡本敏明なのである。

<結論>

**大変な先生によって陶中校歌はできているのである。**

その後の陶中学校は、

昭和27年 組合立陶中学校解体 陶町立陶中学校となる。

昭和29年 市制施行瑞浪市立陶中学校となる。

昭和30年 中学校の下（現在の喫茶「のんのん」の西）にプール完成。

このプールは小学校と兼用だったと思います。

新しく完成したプールのお披露目（プール開き）には、なんと兵藤秀子さんが来て初泳ぎをしたそうです。（陶に来たのは41歳の時）

※兵藤秀子

旧姓は前畑秀子で、1936年（昭和11年）ベルリンオリンピックの200m平泳ぎに出場し、日本人女性として五輪史上初めてとなる金メダルを獲得した。NHKの河西アナは、レースをラジオ中継の際、興奮のあまり途中から「前畑ガンバレ!前畑ガンバレ!」と20回以上も絶叫したというのは有名な話である。

昭和 36 年 生徒数の増加に伴い、校舎裏手に技術室・理科室を備えた校舎増築。

平成 4 年の火災で焼失した陶中学校の校舎は、平成 5 年に前記の写真のような近代的な新しい校舎が完成しました。場所は同じだが、旧校舎がグラウンド北側だったのに対し、新校舎はグラウンド南側に建設されました。

しかし、陶中学校は 1980 年以降の陶磁器産業の停滞・不振、過疎化、少子化により生徒数が激減し、平成 28 年の 3 月に閉校され（稲津中学と統合されて瑞浪南中学となる）69 年の間に 5,633 人の卒業生を輩出したその歴史に幕を閉じました。

なお、この校舎は、陶小学校の老朽化が激しいこともあり、平成 30 年より陶小学校として生まれ変わる予定である。

### (13)陶保育園

明治以降、陶の陶磁器産業が町の主要産業となると、工場では労働力を求め、男手のみならず女手も必要としていました。これに応じて、陶町では夫婦共働きの家庭が一般的でした。こうなると、小学校入学前の子供の面倒を見る施設が必要となります。

昭和 9 年 田口和太郎（明治 21 年～昭和 36 年）は、家業（製型業）のかたわら、地元の陶磁器産業で働く勤労者の足手まどいになる子供たちの保育に立ち上がります。私財を投じて猿爪字広表に、保育施設「陶樂園」を創設、園長に就任し、昭和 27 年 陶町立陶保育園が開園するまで陶の未就学児を見守りました。

陶町立陶保育園は、昭和 26 年の陶中学校に新築移転に伴い、それまで中学校が使用していた陶小学校の第 3 校舎を使い開園しました。その後、瑞浪市の市制移行に伴い瑞浪市立陶保育園に名称変更した後、昭和 41 年の陶小学校移転にともない、その小学校跡に新しい園舎が新設されました。

### (14)旧陶小学校・旧水川分校の面影探し

#### ★旧陶小学校

#### <旧陶小学校の講堂>

昭和 41 年に陶小学校が現在地に移転後は長らくスエ商工組合として利用されていましたが、現在は陶幼児園の駐車場となっています。

右の写真はスエ商工組合時代のもので、講堂として使われていた時には、写真の手前側にステージがありました。前述の拝賀式（元日）等が執り行われ、下田歌子作詞の陶尋常小学校の校歌が書かれた額が飾ってあったはずですが、現在、この場所は建物が取り壊され

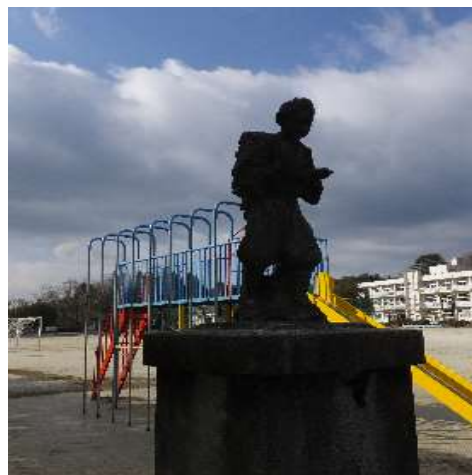




陶幼稚園の駐車場になっている。

### ★陶小学校

現在の陶小学校を西門から訪問すると立派な校門があります。左右に大小の校門が一對あり小さい方が旧陶小学校の校門であろう。



また、東門から入ると二宮金次郎の石像があります。これも旧陶小学校から移設したもので、私たちには大変懐かしく感慨深いものがあります。

### ★旧水川分校

水川分校は昭和 41 年の陶小学校統合後は水川幼稚園として使われていました。現地には統合記念碑が建てられています。

この地から多くの若者を戦場に送り出し、凱旋の式典も行われましたが、不幸にも戦死してしまった兵士の村挙げての葬儀も行われました。



場所は、水上と大川の境にあります。やはり、陶小学校が水上と猿爪の境に建ったように、学校を何処に造るかは村人にとって大問題であり、妥協策として村境に建てたものと思われます。

現在は、ゲートボール場・マレットゴルフ場として地域の方に使われています。



また、学校に面した道には馬頭観音があり、この道が中馬街道であったことがうかがわれます。当時の子供は、中馬街道を行く馬車と一緒に、あるいは乗せてもらって学校へ通ったのではないのでしょうか。



分校跡地脇の馬頭観音